

「21世紀の社会主義」の風景

— ベネズエラ —

写真・文 坂口 安紀
Aki Sakaguchi

ソ連・東欧の共産圏が崩壊して二〇年、中国が改革開放路線のもと高度経済成長を続け、キューバまでもが社会主義経済路線を見直す気配を見せ始めた今日、新たに社会主義国家の建設に邁進する国が南米にある。ベネズエラだ。チャベス大統領は、「マルクスの亡霊が復活する」と宣言し、「二一世紀の社会主義」の建設を目指すことを公言した。チャベス大統領の言う「二一世紀の社会主義」とは何なのか？ 街角の風景や当地の生活のなから、その断片をスケッチしてみよう。



写真① 絵の中で気炎をはくチャベス大統領

● 食品の買い出し

最近店先から食用油が消えた。油を探して近所の大型スーパーに出かける。今日もない。つぎは牛乳の棚に向かう。牛乳の棚も数カ月前までは空っぽだったが、最近では商品が出てきた。今日は棚にある牛乳のすべてのブランドを買ってみた(写真②)。八ブランドの牛乳が売られていたが、うち国産は二つのみ、あとはすべて輸入品だ。ブラジル、ポルトガル、メキシコ、チャリ、エクアドルからの輸入牛乳が棚を埋めている。チャベス政権以前には、牛乳は国産品で自給されており、輸入牛乳など見たことなかったのだが。

食用油を探して小規模スーパーに立ち寄る。ここにもない。ここではジュースを購入した(写真③)。ロス・アンデス社の三種のジュースと生鮮パッケージの牛乳があったので、それを購入する。ロス・アンデス社は地場企業だったが数年前に国有化された。「メイド・イン・社会主義」の文字が入る赤いハートマークが可愛らしい。

食用油を探して最後に三年前に国営石油企業PDVSA傘下に新設された食品小売店PDVALに足を運ぶ(写真④、現在は食料省の管轄)。店の看板には、「社会主義内発的発展の核」「ボリバル政府(チャベス政権のこと)は食料安全保障のために戦う」と書かれている。倉庫のような薄暗い店内には、米、砂糖などの基礎食品がそれぞれ一品目につき一、二ブランドのみ置かれている。ここでようやく探していた食料油を見つけた。ここでの買い物は写真の通り(写真⑤)。よく見ると、トウモロコシ粉以外すべてが輸入品だ。食用油はポルトガル、ツナ缶はエクアドル、牛乳はアルゼンチン、パスタはドミニカ共和国製だ。これらはすべて、チャベス大統領が石油輸出と食品輸入などを取



写真④ PDVALの店構え。



写真② 大型スーパーの牛乳品揃え。8ブランドのうち国産は2つのみ



写真③ 国産化されたロス・アンデスのジュースと牛乳のラインアップ



写真⑦ ガソリンスタンドの価格表示。黄緑の囲みがリットル当り価格



写真⑥ PDVALの商品のドミニカ産パスタのパッケージ。ペトロカリベのロゴと説明。



写真⑤ PDVALでの購入品。

●郊外にドライブ

週末に郊外までドライブに出かける。まずはガソリンスタンドで給油だ。産油国であるベネズエラではガソリンは水よりもはるかに安い。満タン（約三〇リットル）の給油で代金は二・七ボリバル、公定レート米ドル換算でわずか六三セント（写真⑦）。リッター当りの価格は〇・〇九七ボリバル（二・三セント）。ちなみに原油の開発からガソリンスタンドでの販売までの累積コストがリッター当たり一二セントとのこと、差額はもちろん財政負担となる。売れば売れるほど財政負担が増す仕組みだ。

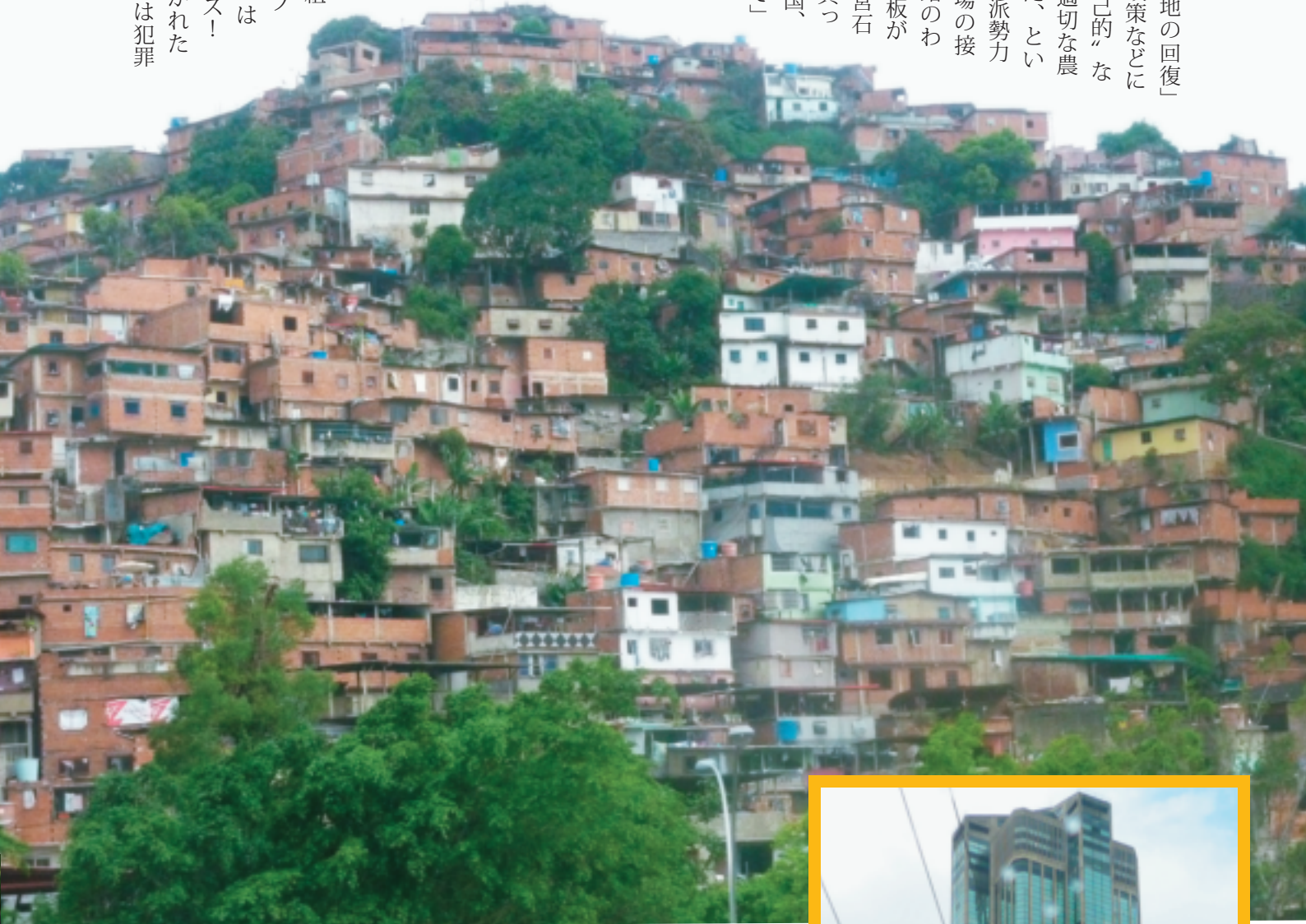
さて、走りだそう。高速道路の両脇には山肌を覆うようにスラム街（ランチョと呼ばれる）が広がる（写真⑧）。チャベス大統領の最大の支持票田だ。昨年開業したばかりのロプウエイが頭上に見えてくる（写真⑨）。カラカスは盆地に位置し、スラム街は急勾配の山肌に張りついて広がっており、足となる公共交通機関がなかった。このロプウエイは、住民の足となるべく丘の上のスラム街と街中を結ぶべく、チャベス大統領の肝入りで建設されたもので、無料だ。

カラカスの街を出て一時間ほどすると、政治プロパガンダの看板が次から次へと出てくる（写真⑩）。「社会主義農地、アラグア州・カラボボ州で五八三二ヘク

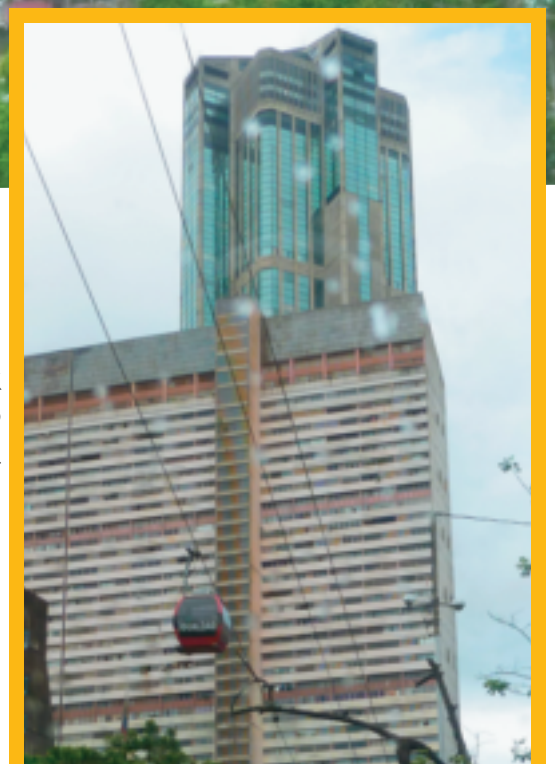
タールを回復」とある。「農地の回復」とは、農産品の低価格維持政策などに抵抗して、生産控えをする利己的な農場主から農地を接収し、適切な農業生産に使用すべく準備した、という意味であろう。反チャベス派勢力が強い前述の二州では、農場の接収が相次いでいる。高速道路のわきには、革命スローガンの看板が次から次へと出てくる。国営石油化学工場の壁いっぱいのは真つ赤な看板が目に入る。「愛国、社会主義か死か。勝利するぞ」(写真⑪)の文字がおどる。

●週末に我が家の近くで

ある週末、近くの大通りから賑やかな太鼓の音やシュプレヒコールが聞こえてきた。チャベス政権の政治弾圧や企業接収・国有化に抵抗する労働者の統一デモ行進の日だ。大勢の人が道を埋め尽くしている。民間企業労組、地方から来た国営企業の労組、大学教職員組合など、さまざまなグループが集結している。「接収にはノー! 労働の権利にはイエス! 結束にはイエス!」と書かれた幕(写真⑫)、「抗議することは犯罪



写真⑧ 丘に広がるランチョ (スラム街)



写真⑨ 街中とランチョを結ぶケーブルカー。ケーブルの左上方向には左写真のようなランチョが広がる。車体には「公正」と書かれている。



写真⑩ 高速道路わきに設置された政府のスローガン看板

さかぐち あき／
アジア経済研究所 在ベネズエラ海外調査員

専門はベネズエラ政治、ベネズエラ地域研究。
近著に坂口安紀編『途上国石油産業の政治経済分析』
(アジア経済研究所叢書6、岩波書店、2010年)がある。

●デジャブ？
チャベス大統領は、「二二世紀の社会主義」の実現を目指すと言う。しかし現憲法に「社会主義」の文字はなく、各種世論調査でも社会主義実現を望む人々は少数派だ。そして何よりも「二二世紀の社会主義」が「二〇世紀の社会主義」とどう違うのが、当地で二年生活していてもどうもわからない。むしろデジャブ感が否めないのは気のせいかな。

ではない、権利だ」と書かれたポスター（写真⑬）。農地を接収されたことに抗議して長期ハンストを決定し昨年命を落としたブリト氏の写真を掲げる人（写真⑭）。ブリト氏のポスターの向こうには、昨年九月の国会議員選挙で全国で最大得票を獲得した反チャベス派議員マリア・コリナ・マチャド氏の姿も見える。彼女は来年末の大統領選挙に向けて反チャベス派の最有力候補の一人でもある。



写真⑫ 「接収にはノー！ 労働の権利にはイエス！ 結束にはイエス！」



写真⑬ 「抗議することは犯罪ではない、権利だ」



写真⑪ 国営石油工場のスローガン看板
「愛国、社会主義か、死か。勝利するぞ」



写真⑭ ハンストで命を落としたブリト氏のポスター。その左4人目の両手を挙げた女性がマリア・コリナ・マチャド氏。